

リフォーム前後の写真



① 既存柱を活かし、太鼓梁（五泉杉）などの構造補強で開放的な高天井を実現。セルフメンテナンスを見据え、木部の研磨・塗装作業などは施主が担当した。難聴児は音だけでなく、口の動きや表情、身振りなどからも多くの情報を得るため、家族がお互いの様子を感じ取りやすいことを大切にした。



② 玄関兼ホール。子どもたちの視覚学習を支える。将来、スロープによるバリアフリー対応が可能な配置としている。



③ コストバランスと断熱性能を考慮して外周壁は大壁とした。外装材には五泉杉を使用し、部分的な補修が可能な押縁仕上げを採用。



④ ダイニングは施主が会長を務めるコミュニティの集いの場としても使用されている。吊照明は既存の柱を再利用して製作した。



A 改修前の外観。個室の増築やサンルームの設置、瓦屋根の葺替えや外壁の張替えなど、その時代ごとの暮らしに合わせて改修を重ねてきた。



B 改修前の和室。縁側や廊下で囲まれていたため、他の部屋との繋がりが薄く自然光が入りにくい環境であった。



⑤ キッチン横のオープンな作業スペース。家具や建具で仕切れば、子ども部屋やリモートワーク部屋などフレキシブルに使用可能。



⑥ 住み継ぎ後の親族の要望で、和室の仏間からLDKが見える配置とした。和室には心地よくこもれるヌックも設けている。



⑦ 家族全員で眠れる寝室。将来住み継ぐ際には個室利用可能。寝室とトイレや風呂などを近くにまとめ、老後の水回り動線にも配慮。



⑧ 脱衣室兼ランドリーコーナー。天井ルーバー内にエアコンを設置し、衣類乾燥の効率化と冬場のヒートショック対策を兼ねた計画。



C 改修前のダイニングキッチン。2000年にシステムキッチンを入れ替えるなど、内部設備も時代に合わせて更新してきた。

リフォームの動機／設計・施工の工夫点／施主の感想・満足度／社会や地域の課題解決に資する取り組み等、審査基準に適合することを示す具体的内容

本計画は、住まい手と工務店の双方が三世代にわたり受け継いできた住宅を、子育て期の10年に合わせ改修し、その後は単身の親族へ住み継ぐことを前提としたものである。室構成は重度難聴の長男に配慮し、家族の気配や表情が伝わりやすいワンルームに近いものとした。暮らしの起点となる玄関には、子どもたちの視覚学習を支える本棚やベンチを設けている。将来の単身居住に向け減築も検討したが、新潟の気候や外構管理の負担を考慮し建築面積は変えない計画とした。内部の快適性と安全性を高めるため断熱性能向上と構造補強を行った。

右記に該当する場合は✓(審査基準参照) ☒ a.ストックの有効活用 ☒ b.技能者不足への対応 ☒ c.地域・コミュニティの活性化 ☒ d.既存流通の活性化等

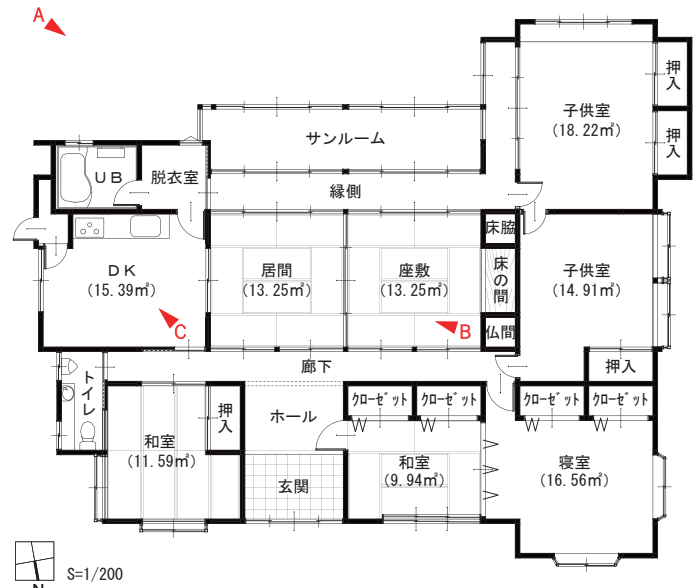
lw値	リフォーム前	0.69	リフォーム後	1.31	UA値	リフォーム前	0.49	性能向上等、特に配慮した事項	・耐震補強 (太鼓梁、耐力面材、筋交、接合金物など追加) ・断熱等級5 (天井:高性能GW20K-200mm、壁:高性能GW36K-105mm、床:カネライトフォーム90mm充填・アルゴンガス入りLow-E複合サッシ)
-----	--------	------	--------	------	-----	--------	------	----------------	--

所在地 新潟県五泉市 新築竣工年 1968年 築後年数 58年 施工期間 180日間

該当工事床面積 177.71㎡ / 総工事床面積 177.71㎡ 該当部分工事費区分1,000~2,000万円未満 / 総工事費区分1,000~2,000万円未満

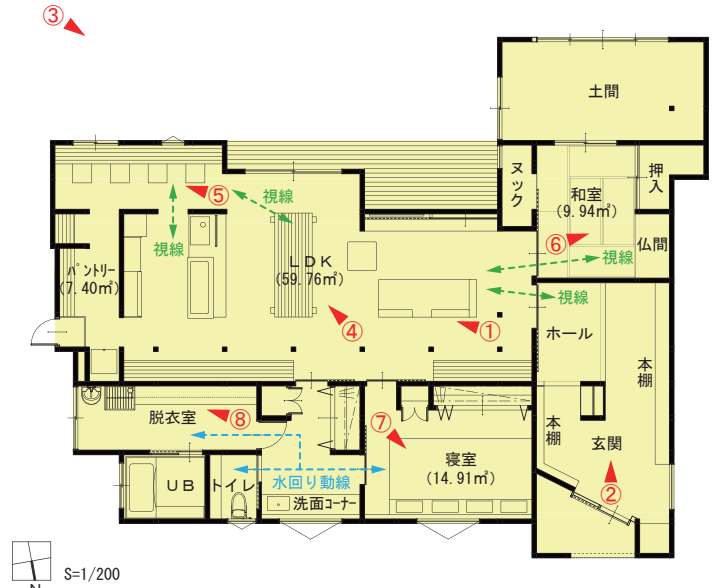
居住者構成 65歳以上: 人 / 40~64歳: 人 / 15~39歳: 2人 / 14歳以下: 2人 / ペット: 人

リフォーム前の平面図



リフォーム部位: ■居室/ ■台所/ ■浴室/ ■便所/ ■洗面所/ ■廊下/ ■階段/ ■玄関/ ■クローゼット/ □マンション共用部分/ □その他

リフォーム後の平面図



講評

本作品でまず感じたのは、この家が歩んできた時間とこれからの時間を丁寧につないでいることである。数年前に空き家となった親族の家を、現在は子育て世代が住み、10年後には定年退職した親族が戻って暮らす。長年にわたり地元の工務店が維持管理してきた建物に、現在と将来、それぞれ異なる世代の暮らしを一つの住まいに描き込んだ計画は、これからの空き家活用を考えるうえでも興味深い。

室内に入ると、広々としたパブリックゾーンと高い天井、ハイサイドライトからの光、間接照明、樹種の違いによる木材の表情が美しい明暗をつくり出していた。空間は端正でありながら温かさと豊かさを感じられる。重度難聴の子どもがいる家族のため、どこにいても互いの気配を感じられる構成としたことは本作品の重要な特徴であるが、広い玄関土間やスムーズな動線、視線のつながりは、どの生活者にとっても魅力的なつくりといえよう。特に玄関土間では、来訪者から「本を借りたい」、子どもから「学校みたいだね」といった声も聞かれるそうで、日常の場であると同時に趣味の会などの交流の場となり、人と人をつなぐ場所として育っていく様子が想像できる。

性能向上にも確かな取り組みが見られる。耐震診断をもとに梁、耐力壁、筋交い、接合金物などを補強し、天井・壁・床の断熱や複合サッシの採用によって、かつて寒さや虫の侵入が課題であった住環境を改善している。エアコンによる冷暖房のみで過ごすことができ、天井ファンによる暖気の循環などデザインと性能が一体となり住み心地の満足感につながっていた。

さらに興味深いのが、所有者が構造・断熱など建物にかかる費用を負担し、現在の居住者が内装・設備や家具、外構など暮らしに関わる費用を負担する仕組みである。所有と居住を分けることで双方の負担を軽減できる合理的な方法であり、空き家を住み継ぐ際の一つのモデルとして参考になる。一方、このようなケースでは現行の助成制度を利用しにくい面もあり、今後の空き家活用を促すためには制度や法の整備も期待したい。

設計者であり居住者でもある施主は、五泉市産材を山から伐採するところから始め、地域の職人が加工・施工を担う「地材地建」の考え方で取り組んだ。黒く扱いにくいとされる五泉杉をあえて用い、その個性を味わい深い表情として外壁などに取り入れ、押縁仕上げにより将来の修繕がしやすい仕組みとしている点なども評価できる。施工には長い期間を要したが、その過程には施主夫妻も参加している。自ら手を動かし、ともに作り上げていく姿勢からは、この家を大切に育てていこうとする思いが感じられた。

人口減少により空き家が増え、地域の工務店や職人が減少する状況が社会問題となるなか、「建てたものは責任をもって支え、住み継ぐ」ことを本作品は具体的に示した。家族の記憶と現在の暮らしを受け止め、次の居住者へとつなぐとともに、地域の木・人・技術をつなぐリフォームの可能性を感じさせる好例として、住宅リフォーム推進協議会会長賞にふさわしい作品と評価した。